

# 雪舞う里に

## 古典の日記念

50th Anniversary

国立劇場開場50周年記念

平成28年度（第76回）文化庁芸術祭主催

組踊 雪払い

真境名正憲  
親泊 興照

能 鉢木

坂井 音重（観世流）

【国立能楽堂企画公演】

11月1日 [火] 午後1時開演

予約開始 = 10月9日 [日] 午前10時～

窓口販売開始 = 10月10日 [月・祝] (チケット売場 午前10時～午後6時)  
窓口販売用に別枠でのお取り置きはございません。

【電話】国立劇場チケットセンター (午前10時～午後6時)


0570 (07) 9900 03 (3230) 3000 (一部IP電話等)

【インターネット】パソコン <http://ticket.ntj.jac.go.jp/>  
スマートフォン <http://ticket.ntj.jac.go.jp/m>

チケットぴあ・e+ (イープラス) でも販売

料金 = 正面 6,700円・脇正面 5,600円・中正面 4,400円 /  
学生：脇正面 3,900円・中正面 3,100円

※文字幕付です (日本語・英語)。  
※観客の方は2割引です。詳細はチケットセンターまでお問い合わせください。  
※出演者などの変更の場合はご了承ください。

 **国立能楽堂**

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1  
TEL. 03-3423-1331 (代)  
<http://www.ntj.jac.go.jp/nou.html>

JR (中央・総武線) 千駄ヶ谷駅下車・徒歩5分  
都営地下鉄 (大江戸線) 国立競技場駅下車 A4出口・徒歩5分  
東京メトロ (副都心線) 北参道駅下車 出口1または2・徒歩7分





## 劇評

長嶺 恵美子

11月1日の古典の日に、東京千駄ヶ谷の国立能楽堂で「雪舞う里に」と銘打った企画公演、組踊「雪払い」と能「鉢木」を観た。能舞台の床材に樹齢400年の檜が用いられるなど、世界最古の舞台芸術である能楽の本拠地だ。屋根のついた能舞台を取り巻く627席の見所と呼ぶ客席は、舞台の真正面となる正面、橋掛かりに近い脇正面、その間の中正面と三つに区分されている。おのおのの座席背面に親切な字幕表示装置がある。

## 国立能楽堂「雪舞う里に」組踊「雪払い」・能「鉢木」



「雪払い」を演じる(右から)新垣悟、眞境名正憲、宮城茂雄、親泊照一、東京都の国立能楽堂(提供・青木信二さん撮影)



「鉢木」を演じる坂井直重(右)、東京都の国立能楽堂(提供・青木信二さん撮影)

た。

「雪払い」が能の「竹雪」に取材したと考えられる組踊なので、能と同時に能舞台で上演する意義は高いと企画したという。「竹雪」ではなく

「い」も音楽と踊りが多用され芝居心も必要とされる眞境名由康版だったからだろうか。どちらも初心者にも理解しやすく、かつ古典芸の精髓も堪能できる取り合わせだ。

の陣容。立方指導と伊祖の子役の眞境名正憲さん、地謡指導は城間徳太郎さん、継子を虐待する継母役に親泊照さん。いたいけな娘思鶴に新垣悟さん、姉思いの弟に宮城茂

は雪がハラハラと舞う演出が喜ばれたが、能舞台では構造上それは叶わない。しかし、立方の演技と音楽で降らない雪が確かに目に浮かんだ。一方、零落しても誇りを忘れない田舎武士の気概とその忠義を描いた「鉢木」も、しんと降る雪が確かに見えた。

# 雪主題に古典の精髓

## 組踊創造の独自性、再認識

劇性の高いと言われる「鉢木」を選んだのは、「雪払い」は国立劇場おきなで前月に上演された第83回組踊公演と同じ立方、地謡

雄さん、他。音楽も立方もベテランと中堅がバランスよく配され充実した舞台だった。特に懸念された能舞台の長い橋掛かりを逆手にとって、本舞台へ続く橋掛かり上でも唱えや演技が入るなど、物語がより効果的に伝わった。

舞台を真横から観る脇正面の席からは、琉球古典舞踊を基本とした立方の所作が新鮮な視点で目に入る。組踊の歩みと、能では運びという摺り足の微妙な違いも見て取れた。歌うような組踊の唱えと古典音楽、紅型衣装などが合

わさつて能舞台を琉球の色に染め上げた。ホームの沖縄でジグアイド『華風』編集者)

は雪がハラハラと舞う演出が喜ばれたが、能舞台では構造上それは叶わない。しかし、立方の演技と音楽で降らない雪が確かに目に浮かんだ。一方、零落しても誇りを忘れない田舎武士の気概とその忠義を描いた「鉢木」も、しんと降る雪が確かに見えた。

同じ雪をテーマにした能と組踊の共演。舞台の構造も装束も音楽も直線的な様式美で力強く迫ってくる能と、柔らかな曲線的な組踊。「鉢木」と見比べたことで、組踊は単なる能の本歌取りではないと感じた。玉城朝薫は大国大和と中国の芸能に追随するのはなく、独自性を大切に創造したのだ。小さな国に理想郷の姿を描く「小国寡民」という言葉が脳裏をよぎった。それにしても古典芸能の奥深さや魅力は汲めども尽きない泉のよう。息遣いまで伝わる能舞台で、双方の出演者それぞれ技量や芸との真摯な向き合い方に魅了された。